外置変形は必要か

阿　部　幸　一

Is Extraposition Transformation Necessary ?

Koo-ichi ABE

Since Rosenbaum(1967) who established the status of Extraposition Transformation, many arguments have come about regarding this transformation. Among others, the following three problems appear to be very popular : (i) Ordering problem between Extraposition and other transformations. (ii) Where is an extraposed sentence or phrase attached? (iii) Is Extraposition Transformation necessary ?

With respect to the first problem, this seems to be out of the question at the present time because of the free ordering of transformational rules based on the Trace Theory. But many scholars (for instance, Williams (1974), Reinhart (1980)) still are arguing about the second problem. Furthermore, recently, the third problem which is concerned with the existence of Extraposition Transformation itself is going to draw the attention of the people to Koster (1978) and Rochemont (1978).

We do not have enough space to treat both (ii) and (iii), so we will focus on the third problem because the problem of the existence of Extraposition Transformation seems to be more important than that of the position where an extraposed sentence or phrase must be attached .

1. Introduction

Rosenbaum (1967)において外置変形(extraposition)[1]が提唱されて以来、現在までいろいろ議論がなされている。その中で、特に多く取り出されている主な問題として、次の3つが考えられる。

1．他の変形との順序づけの問題。2．外置された節及び句はどこに付与されるか。3．外置変形そのものを認めるかどうか。

そのうち、1についてはいままで，Lakoff では post-cyclic だったり，Grinder では cyclic など，いろいろの考えがなされていたが，trace theory において，すべての規則は順序づけがないことに至り、1の問題は一応消えたことになった。つづいて2の問題については，現在でも盛んである。例えば，古く Rosenbaum (1967)では，S の VP の下に付与されると考えられていたが，Williams (1974)においては，complement extraposition は S rule として S の下に，一方，result clause の extraposition は $\bar{S}$ rule として $\bar{S}$ の下に付与されるとしている。また，Guéron (1978)では，extraposition を一律に S の外である $\bar{S}$ の下に付与させているが，Reinhart (1980)では，sentential extraposition は VP に，他方 extraposition from NP と result clauce extraposition は S の下に付与されると考えるなど，現在収拾のつかない状態にある。

残る3番目の問題については，最近になって特に Koster (1978)によって，外置変形そのものの存在を認めず，base から生成しようとする考えが表明されて以来，物議をかもしだしている。またこれに関連して，Chomsky & Lasnik (1977)では，外置変形を文体規則の1つとする考えがみうけられ[2]，それをうけるように，Rochemont (1978)では，extraposition を表層構造後に適用する stylistic rule の一つとして明言している。

上に述べた3つの問題以外にも，Guéron (1978)の外置変形に対する意味部門の制限や，Fukuchi (1978)の Firbas や Kuno らの functional sentence perspective に通じる，外置変形を new information を際立たせるルールと考えるなど，外置変形をめぐる論文は枚挙できないほどである。そこで，ここでは論文の範囲を定めるために，私の一番関心事であり，又，一番問題となっている外置変形（主に，sentence extraposition）の存亡にかかわる第3番目の問題を中心に，最近の Chomsky の理論とのかかわりを考えながら論じてゆきたいと思う。

2.

この章では，現在外置変形の存亡に係わる3つの案を概括する。まず，今まで同様外置変形を認めるものとして Stowell (1979), Chomsky (1979)。次に，外置変形を認めず，base から別々に派生させ，特にとりたてて it と

that clauseを関係づけるようなことをしないものとしてKoster (1978)。最後に，Koster同様，外置変形を認めないが，表層構造後に適用するstylistic rule（文体規則）とするものとしてRochemont (1978)。この3つを順にみてゆくことにする。

2.1 Transformational Analysis (Stowell (1979), Chomsky (1979))

Stowell (1979)の論文は，その題"Stylistic Movement Rules"というのから察すると，変形的分析よりも文体的分析を採っているように思われがちだが，やはり変形的な移動分析を採っている。ただ同じ外置変形を採用しているGuéronとの相違は，Guéronの中心的存在であったPP extrapositionを認めず，NP movementのpied pipingによるものとしているところである。そして，Stowellの中心課題は，いわば，ばらばらの状態であった，there-insertion, heavy NP shift, extraposition from NP, relative extrapositionといった一連のルールは，実のところ同じような制限をうけ，共にstylisticであり，Move NPという，より一般的な変形規則の一部になりえると考えたことである。さらに彼は，Teller (1978)や特にDresher & Hornstein (1979)の，「there-insertionやextrapositionのような指定された要素(there, it)を，その後にそう入するもの以外は，rightward movementを認めない。」という考えをうけて，extrapositionなどは例外的にrightward NP movementを認めるが，leftward movementのような適切なbound traceは残さないとしている。

そこで，次のPP extrapositionの派生において，Stowellは，まずはじめにfull NPを右に移動し（この場合rightward movementなので適切なbound traceを残さない），次にPP reanalysisによりVPの外に出し（このルールは一種のrestructuring ruleなので，またtraceを残さない），再びNP preposingにより文頭へもってくる（この場合は，leftward movementなので，適切なbound traceを残す）。

(1) a. $[_{S}[_{NP}$ a book $[_{PP}$ by Halle]] PRES $[_{VP}$have appeared]]
↓ Move NP
b. $[_{S}[_{NP}$ — —] PRES $[_{VP}$have appeared $[_{NP}$a book $[_{PP}$by Halle]]]
↓ PP reanalysis
c. $[_{S}[_{NP}$ — —] PRES $[_{VP}$have appeared $[_{NP}$a book$]_{VP}]$ $[_{PP}$by Halle]]
↓ Move NP
d. $[_{S}[_{NP}$a book] PRES $[_{VP}$have appeared $[_{NP}$ t$]_{VP}]$ $[_{PP}$by Halle]]

もちろん，この派生自体は，Chomskyの最近の理論における"Move α"の原理に従えば，αはどこに移動されても，それが他の制約に抵触しないかぎり許されるので，この派生はまちがっているとは断言できない。ただ直観としては，PP extrapositionを認めれば，PP reanalysisも必要ないし，解釈部門でNPとPPを関連づけるにしても，PPの移動を認めてtraceを残すとすれば，よりすんなりゆくように思われる。(PPのmovementは"Move α"の1つなので，traceを残してもよい。) traceを残すかどうかについては，Stowellに対し，Chomsky (1979, p.25)では，extrapositionについてもtraceを残すとしている。

(2) a. $[_{NP}[_{NP}$many books with short stories$]_{NP}$ t] are on sale [$_{\bar{S}}$that I wanted to read]
b. *$[_{NP}$many books with$[_{NP}$short stories t]]are on sale [$_{\bar{S}}$that I wanted to read]

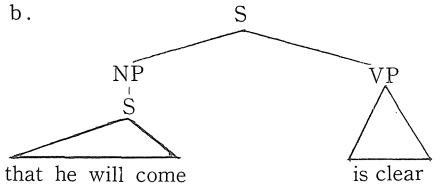
上の例では，Chomskyはextrapositionが Subjacency に従うS−structureの例としている。よって，表層構造においてtraceを残すextrapositionは，変形と考えられるわけだが，実際はもっとこみ入っている。したがって，Movementの分析をとる人にとっては，最近のtrace theoryに鑑みて，extrapositionがtraceを残すかどうかが問題点となろう。これについては後で詳しく述べる。

2.2 Base−generated Analysis (Koster (1978))

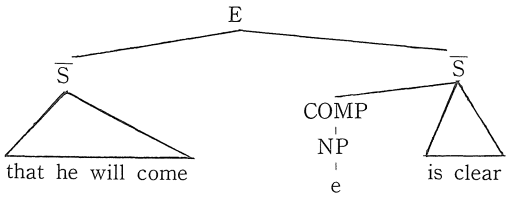
Kosterは，その論文"Why Sentential Subject Don't Exist"の題目が示すように，通常の外置される元の文であるsubject sentenceを認めず，そのかわりにE→$(\{\frac{NP}{S}\})\bar{S}$というbase ruleによるところのsatellite sentenceとして生成させようとしている。従って(3 a)の文に対して，Kosterは通常の(3 b)の構造を認めず，(3 c)として生成されることになる。

(3) a. That he will come is clear.

b.

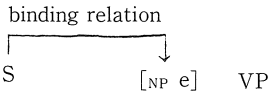


c.



（3 c）において，Eの下に生成される satellite sentence は，同じく base で生成される topic と区別なく，satellite sentence は，たまたま文の形をとった topic である，topical sentence と考えられている。そして，次の binding relation の原則により，satellite sentence である that clause は，is clear という predicate の主語である[$_{NP}$ e] をbind し，その主語と解釈されるとしている。

(4)



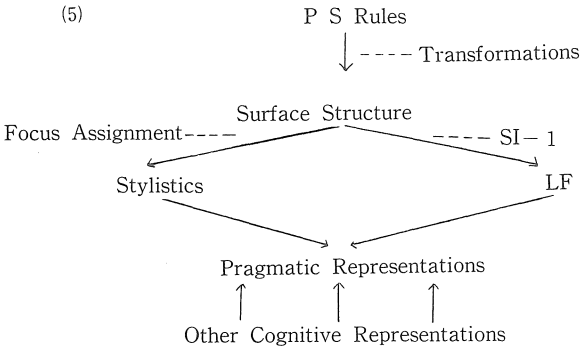
これに対して，通常の外置をうけた文については（彼は，この文を object sentence と呼んでいる），通常の base rule である VP →...V...S...によって基底から文末に生成させることにしている。

従って Koster の議論によると，いわゆる外置をうける前の文(satellite sentence)と外置をうけた後の文(object sentence)の間には，何ら変形的な関係づけはなく，base で別々に生成されており，もしたまたま同じ連鎖の satellite sentence をもつ文と object sentence をもつ文があったとしても，それはたんなる偶然で，両文の同意性をどこかで述べるべきなのに，両文の同意性を述べるところがKosterにおいては存在しない。また，同じsatellite sentence と object sentence の両方をもつ文が，まちがって生成されてしまう。よって，Koster の分析を採用するにしても，次のことが問題になるであろう。1．satellite sentence と object sentence の同意性をどこかで述べる必要があるのではないか。2．object sentence の場合に，なぜ文頭に it がくるのか。3．同じ satellite sentence と object sentence の両方をもつ文を排除するしくみ。

2.3 Stylistic Analysis (Rochemont (1978))

Rochemont は，stylistic rule の定義として，「解釈に影響を与えず，文の使用における文脈制限を課すもの」としており，したがって，意味解釈の適用を受ける表層構造の後に，適用されるとしている。そこで彼の体系は次のように表わされる。

(5)



stylistic rule として Rochemont は，次の5つを考えている。Subject Postposing (extraposition を含む)，Focus NP Shift, PP Extraposition, Subject Substitution（従来の Subject Aux Inversion に相当），Stylistic 'there' Insertion。このうち Subject Substitution を除く4つのルールは，不思議にも，Stowell が上げた stylistic な NP movement と対応する。このことは，とりもなおさず，これらのルールが，類似のグループをなしていることを意味する。Rochemont の目新しいところは，いわば Stylistic 部門を作ったことであり，この部門のルールは表層構造後に適用されるので，一応 trace は残さないとされる。したがって変形規則に課せられる PIC や SSC は免がれるが，Subjacency だけは，あいかわらず受けることなる。しかし，Rochemont の考えている体系と Chomsky の最近の文法体系とは，少し異っているので，Rochemont の分析を採用するにしても，Chomsky の理論と矛盾がないか，例えば，deletion rule や filter との ordering の問題や，Scrambling なども Rochemont の Stylistic 部門に入るか否か等，充分に検討する必要があるように思われる。

3．Problems

前の章における3つのセクションでは，現在における外置変形をめぐる三者三様（正確には四者四様）の考え方を紹介した。その3つを大別すると，(i) Stowell, Chomsky らのとにかく外置変形を温存しようとするもの，(ii) Koster 流の外置変形を認めず，base で別々に生

成させようとするもの，(iii)変形としての外置を認めないことはKosterと同じだが，文体規則としてのいわば外置文体規則を設定しようとするRochemont流のやり方，があることがわかった。これら3つの分析は，たくみに絡み合っており，変形としての外置を認めるかどうかということに関しては，(i)案に対し(ii)案と(iii)案が共謀しているが，外置という移動操作を認めるかどうかということに関しては，(ii)案に対し(i)案と(iii)案が共謀している。そこでこの章では，これら3つの絡み合いを考えながら，それぞれ問題点を指摘し，できれば次の章で代案及び結論を導きたいと思う。

3.1 まずはじめに，議論の都合上，外置という変形規則も移動操作も認めないKosterの分析から論ずることにする。Kosterの論点は，sentential subjectはtopicと類以なので，satellite sentenceとしてtopicalizationと同じような生成のしかたを考えたことであるが，生成のしかたを別として，sentential subjectをtopicの1つとして考えることは好ましいように思われる。従って，Kosterの枠組みでは，次の文は同じ構造をもつことになる。

(6) a. That the doctor came at all surprises me.
b. John, I don't know.

(6a)はtopicalizationの1つで，たまたま文がtopicになった例と考えられる。しかし実際のところは，ふつうのtopicalizationにはpauseが存在するのに，satellite sentenceの場合はpauseが存在しないが，それを無視していいのだろうか。さらに，topicalizationにはそれに対応するleft dislocationというのがあるのに，satellite sentenceにはそういった対応物はない。（その生成のしかたには異論もあるが，Chomsky (1977)ではtopicalizationは変形で，left dislocationはbaseで生成させている。）

(7) a. *That the doctor came at all surprises me it.
b. John, I don't know him.

同様な考えでゆくと，文末のobject sentenceもtopicalizationの一つと考えられ，Kosterでは言明されていないが，なるほどそれに対応するものはある。

(8) a. It surprises me that the doctor came at all.
b. They spoke to the janitor about that robbery yesterday, the cops.

ここにおける(8b)はright dislocationと呼ばれるもので，前にanaphorを必要として，topicalizationのようにanaphorのない次のような文は正しくない。

(9) *spoke to the janitor about that robbery yesterday, the cops.

そしてitをthat文のanaphorと考えれば，まさしくright dislocationと類似となる。但しここでもまた，right dislocationはpauseをもつが，object sentenceはpauseをもたないようである。

以上の他に，本文でふれなかったSubjacencyを加えると次のようになる。

	照応形	pause	subjacency
satellite sentence	×	×	○
topicalization	×	○	○
left dislocation	○	○	×
object sentence	○	×	○
right dislocation	○	○	○

これら5つの文型は，たくみに絡っており，Kosterみたいにsatellite sentenceとtopicalizationだけを同一に扱うのは，片手落ちであり，私の考えではsyntaxでこれらを統一的に扱うのは，むつかしいように思われる。少くとも，Chomsky (1977)では，topicaliztionとleft dislocationを別の生成のしかたを採っている。但し，これら5つの文型は，すべてnew intormationを際立せるものなので，何らかのレベル（例えばdiscourseのlevel）で，統一的に扱われるかもしれない。（ここではextrapositionについての論文なので，それ以上については他のところで述べることになろう。）そしてsatellite sentenceとobject sentenceについては，どこかのレベルで関係づけられるべきである。なぜなら両者のcognitive meaningは同一であるから。よって，両者を何ら関係づけようとしないKosterの分析は，甚だ事実に反している。ついでながら，topicalizationと類似な構造であるべきsatellite sentenceは必ず後にempty subjectを必要とするが，一方ふつうのtopicalizationにはそのような要求は必要ない，この区別はどうすべきか。

(11) a. *$[_{E}[_{\bar{S}}$that the world is flat$][_{\bar{S}}[_{comp}[_{NP}$ it$]][_{VP}$turns out to be true$]]]$(satellite sentence)
b. $[_{E}[_{\bar{S}}$as for an elephant$]$ $[_{\bar{S}}[_{comp}[_{NP}$his trunk$]][_{VP}$ is very long$]]]$(topicalization)

さらに，sentential subject を他の subject と区別して，satellite sentence とする積極的理由がない。(たんなる subject でも topic になりえる。) topicalization と satellite sentence を同一に扱おうとする分析はあやしいので，Koster の理論をそのまま採用することはできない。従って Koster の理論について言えることは，sentential subject を satellite sentence として topicalization と同一にすることは魅力があるが，subject sentence と object sentence を別々に生成させて何ら関係づけをしないのは，正しくないように思われる。よって Koster のように base-generate しようとも，両者はどこかのレベル（例えば意味部門）で移動的な関係づけの操作が，要求されることなろう。(やり方としては，例えば，両者を syntax において別々に生成させておくが，L.F. で両者に同一な意味を与える方法などが考えられる，この場合の操作は明らかに意味解釈規則となる。)

3.2 次に，外置変形をそのまま温存する，Stowell や Chomsky の分析について，考えてみることにしよう。ここにおける焦点は，2.1でも触れたように，trace を残すかどうかの問題である。Stowell の extrapositon は trace を残さないが，Chomsky の方は trace を残す。まず trace を残さない分析の，Stowell から始めることにしよう。

Stowell は，その論文でも触れているように，Dresher & Hornstein (1979)や Teller (1978)などの，leftward movement しか認めないやり方を踏襲している。こういった考えの源流は，Chomsky (1976)などにみられる，なるべく多くのルールを，一つのメタ・ルールである wh-movement の中に組み入れることによって，可能な変形をなるべく少なくして，変形部門の利を上げようとする考えに見ることができる。そして，最近の Chomsky (1978)の“On Binding”に至っては，すべてのルールを，“Move α” という一つのより一般的な形に，あてはめようとしている。

こういった変形の数をなるべく減そうとする考えの一つが，syntax では leftward movement しか認めないというやり方であり，この考えに従えば，rightward movement を認める必要がなくなるので，変形の過大能力が削減され，それだけ変形部門が制限されることになり，したがって，その分だけ可能な文法が狭ばれることになる。そして，こういった考えは，まことに結構である。ただし，問題がないかというと，そんなことはない。問題になるのは，削ろうとしても削ることのできない，there-insertion と extraposition の 2 つの rightward movement の扱いである。これら 2 のルールは，その分析がどうであれ，可能な文法に含まれるべきだと思われる。

そこで，Stowell らは，2.1で述べたように，there や it などの例外的に指定される要素にかぎって，rightward movement を認めざるをえなくなった。ただし，Teller では，もっと leftward movement の分析に徹しているので，例外ですら extraposition などの rightward movement を認めず，base において，動詞の種類によって，[△—S] を取るものと，[it—that S] を取るものに分けられており[3]，後の形をもった文は，いわば base から extraposition した形の object sentence をもつことになり，一方，前者の形をもった文は，そのまま表層で△をもつと非文になるので，それを避けるために，義務的に leftward の NP movement が適用されることになる。しかし，この分析は，Koster の分析の際に述べたと同様に，△の位置へ義務的に prepose される文と，that の後にくる文が別々に生成され，両者の同意性が説明されないので，採用しがたい。

Stowell らは，例外的に there-insertion や extraposition を認めたが，他の leftward movement と区別するために，trace を残さないとしている。しかし，例外的にせよ，rightward movement を認めたために，彼らの理論は，相当弱くなっている。彼らの理論を救うためには，there-insertion と extraposition を別の部門へもってゆくのが，手っ取り早いやり方である。なぜなら，一般的には，syntactic rule のみが trace を残す，と考えられているからである。そして，少なくとも，Guéron(1978)が上げているような，extraposition(彼女においては PP extraposition)が許されるのは，appearance の動詞にかぎる[4]，といった条件は，彼女のように L.F における filter とするか，又は lexicon の方が述べやすいように思われる。

したがって，やり方としては，次の 3 つがあると思われる。1) Bresnan 流に lexical rule とする。2) semantic rule にする。3) (semantic) filter をどこでかけるか問題となるものの，Rochemont 流に stylistic rule にする。どの分析をとろうとも，他に問題があるかもしれないが，trace に関する限りは問題はない。なぜなら，すべて統語規則でないので，trace を残す必要はないから。

ところが Chomsky (1979)においては，“Move α”の原理を syntactic rule のみでなく，logical form のルールや phonological rule にまで拡大している。

(12) Chomsky (1979, p.24)
There is good reason to believe that the rule “Move α” also applies in the mapping from S-structure to phonetic form and from S-structure

to logical form.

したがって，Chomsky (1979)においても，いまだ extraposion が syntactic rule かどうかはっきりしないが(少くなくとも，私のあげた(2)の例に対し，Chomsky はそれを S-structure と呼んでいるので，その trace は移動変形の結果と考えられ，私は Chomsky (1979)の分析を，Movement Analysis としてとりあげた)，extraposition は，明らかに trace を残すルールとなっている。

こういった考えの１つの萌芽は，Chomsky (1978)の p. 5 にみられ，そこにおいては，Stowell において extraposition 同様，問題となった there-insertion に対する，there-interpretation として，次のような派生が考えられている。

(13) a. $[_{S}[_{NP_i}$ *there*$]$ is NP_i...] ("there is a book on the table")

b. (there is $NP_i)_x$ $[_{S}[_{NP_i}\ x]\cdots]$ ("(there is a book)$_x$ $[_{S}$ *x* on the table] ")

ここでは，surface stracture である(13a)に，すでに there が挿入されてており，かつ，その同じindexing を後にもつので，trace を残す rightwand の NP movenent の後，there がその trace の位置に，挿入されたことがわかる。一方，その logical form(13b)では，there is NP_i という連鎖が，there-interpretation という意味解釈により（名称は意味解釈規則だが，内容は移動変形の場合と類似して)，Sの外に取り出され，後のSにはちゃんと trace が残されている。

同様な派生のしかたは，wh-interpretation や quantifier-interpretation にもみられる。ここでは比較のため，extraposition from NP の例も上げる[5]。

(14) wh-interpretation:

a. who did John see t.

b. for which person x, John saw x.

quantifier-interrpretation:

c. John saw everyone.

d. for every person x, John saw x.

extraposition from NP

e. many books that I wanted to read are on sale.

f. many books t are on sale that I wanted to read.

はたして，同じく trace を残すことなった，syntactic rule と semantic rule の区別は，どこにあるのであろうか，さらに phonological rule との相違は。

syntactic rule と semantic rule の相違は，Subjacency を守るかどうかによるとも，いえるかもしれないが，その最大の相違は，S-structure の前に適用するか後に適用するかの違いである。syntactic rule は，base で生成された連鎖に対して，いわば積極的に移動を行ない，意味が決定される S-structure に対して，非文法的な文を含めてあらゆる可能な文を生成させることに関与する。一方 semantic rule は，syntactic rule のような積極的な能力はもたず，syntactic rule により生成された S-structure の中で，phonetic 部門の filter と同様に，semantic な filtering も行いながら，現実に許される連鎖(文)に，正しい解釈を与えるという，いわば消極的な解釈能力しかもたない。(これ以上の議論は，私の論文の範囲を越えるので，またの機会に譲る。)

しかし，"Move α" の syntactic rule のみならず，semantic rule や phonological rule までの拡大は，一見したところ，私には，syntax の phonology や semantics 部門への拡散のように思える。ここでは，それらの他の部門への影響を，考える余裕はないが，少なくとも音韻部門について言えば，不必要な trace を残すことにより，問題が生じることがあるのではないかと，懸念される。例えば，Chomsky & Lasnik (1977)などにおいては，trace は phonological rule を block することが示されている。

(15) a. who do you want to see t.

↓ *to* contraction

b. who do you wanna see t.

c. who do you want t to see Bill.

↓ *to* contraction

d. *who do you wanna see Bill.

また Selkirk (1972)にも，trace が phonology において，boundary とかぞえられることが示されている。ということは，phonlogy のルールも，"Move α"の convention に従い，後に同じ index をもつ trace を残し，音声的に１つの boundary を形成すると考えると，例えば，Ross (1967)における Scrambling のような操作は，Chomsky & Lasnik では一応 stylistic rule と考えられており，これも広く言えば，phonological rule として考えられるが(少くなくとも，syntactic rule でないことは確か)，次の例のように，不必要に trace を残し，stress rule などに混乱をきたすのではないかと，考えられる。

(16) a. Homō bonus amat fēminam pulchram.

(The good man loves the beautiful woman.)

↓ Scrambling

b. Pulchram$_i$ homō t$_j$ amat fēminam t$_i$ bonus$_j$.

この場合, trace がなくとも, その格変化により関係がわかり, 又, 音声的にも両者は区別がないと考えられるので, とくにとりたてて, こういった場合まで, trace を認める必要はないように思われる。とするならば, 従来どおり, 一方のみを syntax 内で生成しておいて, すべての音頭規則をかけてから, trace を残さない移動的な Scrambling を適用した方が, すっきりしているように思われる。よって, 意味部門はいざ知らず, 音頭部門にまで, "Move α"の原理をもちこもうとするのは問題であり, syntax の拡散にほかならない。

3.3 最後に, 残る Rochemont (1978)の stylistic rule としての, extraposition の検討を行なう。Rochemont の stylistic rule は, Chomsky の場合と異なり, trace を残すことなく, 表層構造後に適用されるとしている。但し, Chomsky の枠組とは少し異なっており, また Rochemont も言明していないので, いわゆる phonology の中に含まれると思われる stylistic rule が, deletion や filter の後に適用されるかどうか明かでない。

一応ここにおいては, stylistic rule が deletion や filter の後に適用されるとすると, Rochemont の extraposition によって派生される object sentence は, 意味が決定される表層構造においては, まだ存在せず, それに対応する subject sentence が意味部門に入ってゆくことになる。これは意味解釈の観点から言えば, どうせ同様な解釈をうけることになる, object sentence と subject sentence を別々に生成させることなく, 一方の解釈で済ましている点で, 合理的である。一方, Chomsky ら変形の立場では, 深層で意味が決定されるというＳＴはいざしらず, 現在の表層で意味が決定されるというＲＥＳＴにおいては, base で subject sentence を生成し, (拡大) 変形部門において object sentence を派生させ, 又, 意味解釈で統一するのは, あまり合理的でない。

しかし, この分析に問題がないかどうかというと, そんなことはない。問題としては, すべての subject sentence が extraposition を受けるわけではない, という事実である。これを説明するためには, extraposition に制限を課せなければならない。rule に制限を課せるのは, 言語修得の観点から言って好ましくないので, filter によって制限した方がよい。すると, extraposition が許されるは, Guéren に従えば, presentational を表わす appearance の動詞に限られるので (例文は注４) 参照), これは動詞の語い的な意味制限となり, 一種の semantic filter と考えられる。

ところが, こういった意味的な要因をもつ filter を, phonology の中にもってきてもいいのだろうかという疑問が生ずる。(ただし, Chomsky における logical form において適用する, Binding の条件がどれだけ意味的であり, また例えば, *[$_{NP}$NP tense VP](Chomsky & Lasmk p.483)のような filter が, 大きく言えば phonology に入るのに, どれだけ音韻的かを考えるならば, 上のことは, 問題にならないかもしれない。) といって, こういった semantic filer を, logical form で適用することはできない。なぜなら, 意味部門には, extraposition を受ける前の subject sentence しか入っておらず, 排除されるべき appreance を示す以外の動詞をもつ extraposition の例は, 入力として logical form の中に, 入ってきていないからである。

また意味的な制限以外にも, 統語的と考えられる制限がある。例えば, 次の文のように, 間に object があったり, focus をうけた VP adverb がある場合は, extraposition されない。(同様な現象は, there 構文や PP preposing にみられることを, Stowell は指摘している。)

(17) a. *A book entered the discussion by Lenin.

b. *A book was released lete about generative semantics. (PPEXT)

cf.

c. *There met me a very nice woman.

d. *There came in noisely a clown from Budapest. (there-insertion)

e. *Through the door entered the room an old man.

f. Through the door noisely entered an old man (PP preposing)

しかし, 上の例は PP extraposition の例であって, 同じ現象は, 他の relative の extraposition や subject からの extraposition (ここで一貫して上げてきた一般的な extraposition) には, 見れないようである。

(18) a. A man picked me up who has a shiny new car.

b. A bad book was circulated quickly that Chomsky talked about himself. (relative extraposition)

c. It pleased me very much that they played those records.

d. It strucked me quickly that I might lose the case. (subject からの extraposition)

この論文では，主に主語からの extraposition について考えてきたので，他の extraposition にまでわたって考える余裕はないが，やはり同じ extraposition とは言え，そのふるまいは，Introduction で述べたように，その付与される位置をも含めて，同一ではないが，その違いはどこか適切なところで述べればいいのであって，extraposition にかかわるすべての操作は統一的に扱われた方がよいと思われる。

すると，Rochemont における stylistic rule としての extraposition にかかわる，残りの問題は，(17)のような文を排除する，いわば統語的 filter と，apprearence を示す以外の動詞には，extraposition が適用されないという意味的な filter が，それぞれどこで適用されるかである。これが解決されたならば，現時点では，extraposition について考えられる，有望な提案となろう。

4．Conclusion

前の章では，前々章で紹介した，主な3つの分析に対し，多少なりとも comment を付け，それぞれ問題点を指摘したつもりである。そこで指摘されたことは，次のようなことだと了解する。Koster 流の subject sentence である，satellite sentence と object sentence を独立して生成させ，両者を何ら関係づけないのは，言語事実からみて正しくない。Stowell や Chomsky における，統語規則としての extraposition が，trace を残すかどうかという問題に関しては，最近の Chomsky (1979)の“Move α”の分析のように，logical form のルールはいざ知らず，phonology のルールにまで，trace を残すと考えるというのは行き過ぎであり，extraposition を syntax 以外の部門と考えるならば，Stowell らを悩ました問題も解決でき，したがって trace は残さないことになる。Rochemont の上げた，stylistic rule としての extraposition の扱い方は，semantic filter や syntactic filter の問題を解決できるならば，見込みのある理論になるであろうと述べた。

上の結論以外に，ここでは，とりたてめざましい対案を立てるほどの考えが，現在の私には，残念ながら，ない。しかし，強いて考えるならば，Rochemont の分析を修正することになろう。一時期には，semantic rule としての extraposition の可能性や，lexical rule としての extraposition の可能性も考えたが，semantic rule とすると，表層には一方の subject sentence しか生成されず，それが音韻部門へ入っても，subject sentence がひきつづいて現われているだけで，object sentence は音声的には出てこないことになり，他方，意味部門では，subject sentence と object sentence の2文が，解釈されているのはおかしい。(意味部門はそれほどの生成能力をもたないはずである。)

また，lexical rule については，最近の Bresnan の研究のように，wh-movement を除いて，すべて lexical rule としてしまうのは，少々行き過ぎのように思われるが，extraposition を lexical rule とすると，extraposition は apprearence を示す動詞にのみ，許されることになり，base からすでに2つの文(subject sentence と object sentence)が生成されることになる。しかし，Bresnan の枠組みでは，EST と同様，意味解釈が深層と表層の両方で適用されるので，許されるやり方であって，最近の Chomsky の trace theory の枠組みでは，うまくゆかないように思われる。すなわち，Chomsky の枠組みでは，たとえ lexical redundancy rule としての extraposition によって，派生された object sentence であっても，表層構造には，subject sentence と object sentence の2文が生成され，2つの文が意味部門に入って，2つの文を結合させるような，また余分な解釈規則が必要となる。一方，Bresnan の場合には，semantics の方へは，subject sentence の方しか入力として入らないので，問題とならないように思われる。こういったやり方は，合理的とは言えないが，semantic rule に比べては，ましだという点において，ここではその可能性だけを指摘するに，留める。

残る，現時点ではもっとも有望とされる。Rochement の分析の修正については，そのネックとなっていた semantic filter と syntactic filter の問題であるが，Chomsky の枠組みを，次のように修正したら，回避できるのではないかと思われる。

(19)1. Base rules
2. Transformational rules
3a. Deletion rules　　3b. Construal rules
4a. Stylistic rules　　4b. Interpretive rules
(extraposition, there-insertion, etc.)
5a. Filters　　5b. Conditions on binding
6a. Phonology and Scrambling
(cf. Chomsky (1978, p.4) Chomsky (1979, p.12))[6]

(19)の ordering では，deletion rules の後に，stylistic rules をもってきたが，確証があってそうしたわけではないので，今後もっと検討が必要となろう。この ordering の特徴は，stylistic rules を filters の前にもってきたことと，従来ばくぜんと stylistic rule と呼ばれてきた，Ross の Scramblimg と，Rochemont や Stowell らのいう extraposition や there-insertion を含むものとに分

離して，Ross の Scrambling については，phonology の後とし，一方，extraposition や there-insertion などについては，Rochemont の命名をそのまま用いて，stylistic rules として，表層後に適用させたことである。

この分離の理由としては，extraposition や there-insertion の適用後には，'it'や'there'という音声形が加わるので，純粋の phonology の前でなくてはいけないが，Scrambling は単なるならべ換えなので，Phonology の後でもよいとした。

(19)の枠組みに基づくと，extraposition の場合には，表層までは subject sentence しか生成されないが，次に deletion rules を受けた後，stylistic rule としての extraposition がかかり，subject sentence から一律に object sentence から派生されるが，その中には，appearence を示す以外の動詞の文や，object や focus をうけた VP adverb をもつ文(PP EXT)も含まれるので，次に来る filters によって悪い文は排除されることになる[7]。意味解釈の後に，extraposition が適用されるので，trace の問題もなく，解釈的に言っても，一方の解釈で済むので，功利的，合理的である。ただ問題となる filter については，仮に次のようなものを考える。

(20) *[it...V...that S] , unless V has[+appreance]

(20)の filter においては，base において，動詞が[+appreance]という素性を与えられるかどうかということを，前提としている。(20)の filter は，subject からの extraposition しか説明できないが，there-insertion や他の例も説明できるように，もっと一般的な形で定式化されることになろう。PP extraposition に対する filter は，省略する。

以上，結論といいながら，くどくどと述べてきたが，結語として言えることは，本論の題である。「外置変形は必要か」の答として，私は外置変形という外置変形操作は認めないが，文体的操作としての外置は認めることになった。

（注）

1）ここで外置変形とは，(a)から(b)を導く変形をいう。
(a) That you could do such a thing bothers me.
(b) It bothers me that you could do such a thing.
これに対し，Emonds (1970)や Jackendoff (1972)では，これとまったく逆の方向の，(b)から(a)を導くという intraposition という変形を考えているが，あまり広く認められていないので，ここでは，外置変形の方を採用する。

2）但し，後でみるように，Chomsky (1979)では，extrapositon も trace を残し，syntax ばかりでなく phonology や logical form にも適用する"Move α"の一つとしているので，extrapositon が Chomsky において，変形規則なのか文体規則なのか，はたまた他の類（例えば，意味規則）の規則なのか，明らかでない。しかし，Subjacency に従うので，Sentence Grammar 内にあることは，まちがいない。

3）いわゆる extraposition を受ける文は，実際には2つの構造をもつことになる。

4）例えば次の例を参照。
a. A book by Chomsky appeared.
b. A book appeared by Chomsky.
c. A book by Chomsky fell.
d. *A book fell by Chomsky.
彼女は，これを説明するのに，いわば semantic filter を用いているが，extraposition については従来同様，syntactic rule と考えている。

5）Chomsky (1979)では，phonological rule の trace を残す例は，示されていない。

6）ここでは，Chomsky (1978)の修正という形で与えたが，Chomsky (1979)では，D-structure, S-structure, Surface Structure という概念を導入することにより，より細分化されてはいるが，deletions → filters → stylistic rules という従来の ordering は，変っていない。

7）Chomsky では，Subjacency を規則の適用条件として，特に filter と言明しているわけではないので，ここでも，Subjacency を特に filter と考えず，syntactic rule と stylistic rule については，そのルールの適用の際に，条件づけられるとする。

主要参考文献

1. Chomsky, N. (1976) "On *Wh*-Movement," in A. Akmajian, P. Culicover, and T. Wasow eds. *Formal Syntax*, New York: Academic Press.
2. Chomsky, N. (1978) "On Binding," unpublished first draft, MIT.
3. Chomsky, N. (1979) "Principles and Parameters in Syntactic Theory, "unpublished paper, MIT.
4. Chomsky, N. and H. Lasnik (1977) "Filters and Control, "*Linguistic Inquiry* 8, 425-504.
5. Dresher, B. E. and N. Hornstein (1979) "Trace Theory and NP Movement Rules," *Linguistic Inquiry* 10, 65−82.
6. Fukuchi, H. (1978) "The applicability of complement extraposition and functional implications,"

Studies in English Linguistics 6, 32—50, Tokyo: Asahi Press.

7. Guéron, J. (1978) "A semantic filter for PP extraposition," unpublished paper.
8. Koster, J. (1978) "Why Sentential Subject Don't Exist," unpublished paper.
9. Ohashi, T. (1979) *A Study of Extraposition,* unpublished M.A. thesis, Nagoya University.
10. Reinhart, T. (1980) "On the position of extraposed clause," *Linguistic Inquiry* 11, 621—624.
11. Rochemont, M. S. (1978) *A Theory of Stylistic Rules in English,* unpublished Ph.D. dissertation, Univ. of Massachusetts.
12. Rosenbaum, P. S. (1967) *The grammar of English predicate complement constructions,* MIT.Press.
13. Stowell, T. (1979) "Stylistic Movement Rules," *Linguistic Inquiry* 11, 621—624.
14. Teller, V. (1978) *The Syntax of Leftward Movement in A Transformational-Generative Grammar of English,* unpublished Ph.D. dissertation, New York Univ.

(受理　昭和56年1月16日)